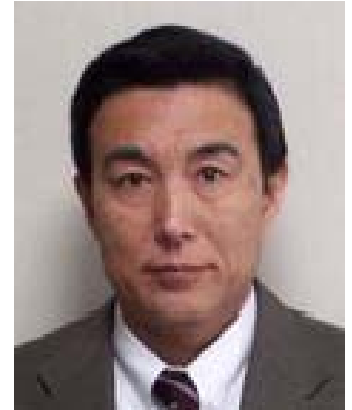


# 米本昌平教授(総研大)

## 「現代自然哲学の特異点としての ハンス・ドリーシュ」

日時：2012年7月27日(金) 16:00~17:30

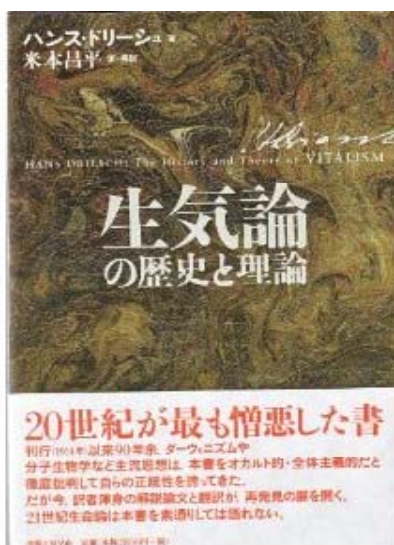
場所：早稲田大学50号館 2F共用会議室AB  
(先端生命医科学研究センターTWIns)  
[www.waseda.jp/advmed/access/index.html](http://www.waseda.jp/advmed/access/index.html)



今回のセミナーでは、著名な科学史家・科学技術社会論研究者の米本昌平先生に、そのライフワークであるハンス・ドリーシュの自然哲学についてお話しいただきます。

ドリーシュはウニの胚発生の研究で知られる発生学者ですが、科学史上の大論争を巻き起こした目的論研究で知られています。機械論vs目的論の対決の構図が戯画化されていく中で、ドリーシュの目的論研究は激しい批判、そして忘却されていきます。米本先生は、ドリーシュの生命観の中に、現在でいうところの生命情報理論の萌芽を見てとり、その評価の見直しと、なぜ激しく批判されたかについての科学史研究を行ってきました。その成果は、ドリーシュの『生氣論の歴史と理論』の邦訳と解題、大著『時間と生命』などにまとめられています。

システム生物学・合成生物学の台頭を迎えた今、「生命システム」という視座の嚆矢となったドリーシュの思想を改めて反芻すべき時期なのではないでしょうか。今回は、コメンテーターとして、生命論の歴史に詳しい科学史家の林真理さん(工学院大学教授)もお招きし、議論を深めたいと思います。どうぞご来聴ください。



\*本講演は、文科省科学研究費 基盤研究C「ポスト・ゲノム時代のバイオメディア・アートに関する調査研究」の支援を得ています。

お問い合わせ：  
岩崎秀雄  
(metaPhorest,早稲田大学)  
[hideo-iwasaki \(at\) waseda.jp](mailto:hideo-iwasaki@waseda.jp)